

特集・地域研究の新地平

地域研究 — 実践知の新たな地平

古 川 久 雄 *

Area Study: A New Horizon of Activist Epistemology

FURUKAWA Hisao*

To recover the sense of holistic fulfillment that is noticeably lacking in communities and academic fields, area study may contribute to a resurgence of energy for rebuilding communities and recombining partitioned disciplines. The key is to abandon the belief in expertise, and to reconcile activism with the golden mean that founded classical scholarship in ancient China and Greece.

On our path to this golden mean, we need to refine basic concepts and methods in area study. Above all, we need to reconsider the naive perception of area that refers implicitly to actualities in physical space and time, and to recognize three phases of area. The conventional area concept is specified as the phase of "natural area", in which man and nature interact with each other and create active cultures and institutions. Onto this, other two phases are to be superposed, "meta-area" and "holistic area". "Meta-area" is the phase that is reconstructed in man's metaphysical recognition. "Holistic area", which is comprised of these two phases, rests on the mutually sustaining balance between them.

The processes of hegemonic expansion of European powers and the diffusion of the idea on man's dominance over nature in modern times have deformed the balance of these phases, and created "parasitic meta-area" such as colonies and extravagant cities. Cloning and nuclear arms, which may endanger all life on earth, have generated fears about the appearance of new "parasitic meta-areas". The aim of area study is the pursuit of the means to prevent the explosion of "parasitic meta-areas" by discovering the logic of "holistic area".

The conventional concept of the intrinsic nature of an area is also to be examined since the global dissemination of culture and natural elements have undoubtedly influenced the conditions of various areas.

Pursuit of the golden mean in solving contemporary problems that an area faces is recommended to students with more emphasis than pursuit of differences among areas.

* 京都大学大学院アジア・アフリカ地域研究研究科, Graduate School of Asian and African Area Studies, Kyoto University

1. 中庸—踏み出す方向

京都大学アジア・アフリカ地域研究研究科の必修科目に、地域研究論、アジア・アフリカ地域研究演習がある。そこで出された学生のレポートと、教官、学生間の議論について、印象を述べてみたい。レポート作成の課題はこれまでの3年間で違う。98、99年度は学生が最も感銘を受けた講師の講義について、その要旨と批判をレポートさせる形であったが、2000年度はこの限定はなく、自由感想形式であった。講義について、理解、要約、批判のステップを踏むトレーニングとしてみると、立本成文氏（京都大学東南アジア研究センター）の課した99年度の方式が明らかに優れている。レポートの内容に即して、講義の内容を自然—人間、分析—総合の座標軸に位置づけた立本氏の分析も提出された。2000年度の方式ではレポートに焦点がなく、拡散した印象論になってしまった。しかし、講師の話に縛られない感想には別の意味があった。学生を通して、地域研究や研究科に向けられているより広い一般的な期待や批判が何であるか、ストレートに表現されている。学生の疑問、批判を端的に表現すると、地域研究って何、ということになる。

オムニバス講義の制約もあるが、学生達には教官が地域研究についてのコンセンサスを持っていないと映り、それぞれの専門の研究テーマと地域研究を結合するのに苦勞している、要するに教官も地域研究が何を目指す場なのか、必ずしも明確な自覚を持っていないと、見透かされてすらいる。

連続講義最後に行われた講師と学生との議論を聴きながら、私の頭を占めていたのは、中国とギリシアの古典世界で確立していた共通の哲学的概念のことであった。儒教で中庸と呼ばれる徳、それを作る中と名づけられている形而上的概念のことである。過ぎたると及ばざるのなきこと、偏らざること、ほどよき中ほどを守れ、という境位である。ギリシアでは、それは「専門家」に対する不信として表現される。ソーシャル・エコロジーを開拓したブクチンは、ボリス社会からヨーロッパに受け継がれたこの考えを称えて、こんなことを言っている。「過剰な専門技能は人間の性格を特殊な関心に偏らせる。むしろ、あらゆることについて少しずつ知っており、ひとつのことについて多くを知り過ぎないことは円満な人格の証拠である。黄金の中庸を心がけるひとは、必要が生じたときに、ある問題についての知的な見解を構築し、その判断に十分な根拠を与えられる」。ブクチンはこのようなアマチュアリズムがギリシアの哲学、科学、数学、演劇に基礎を与え、その伝統が中世から近代に至るまで、熱狂と喧騒を抑制する暗黙のルールだったことを振りかえっている。

中庸礼賛者として、付け加えておきたい。総合的地域研究という我々の看板は己を偏り無く知る黄金の中庸を目指すということだ。己は自己であり、他己である。一人でもあり、大勢でもある。人であり、自然である。初めと終わりのある個体という在り方において、すべての存

在は共通である。離れて個体としてあるが、すべての己は共通性を持ち、見えない糸で結ばれた存在である。共通性をもつ個体が集まったこととあそこは一つの世界である。梵が現象化した世界である。

共通の世界のはずなのだが、己から見ると、自己と他己は違い、こととあそこは違う。同じ空間でも自己のここと他己のここは違う。違いをめぐって、たとえば、エルサレムのユダヤ人とパレスチナ人は血を流し合う。一方は、ここはユダヤ人の土地と言い、他方は、ここはパレスチナ人の土地と争う。日本人から見ればユダヤ人もアラブ人もよく似ている。容貌も体格も言葉の調子も宗教も似ている。超乾燥を生きるオアシスのたたずまいは同じである。しかし彼らは闘う。違いの意識が己の存在根拠になっている。違いの意識を取っ払われると、己もこのオアシスも闇夜のカラスのように消えてしまうと思っているかの如くである。日はまた昇るのに。違いの意識こそ、このカラスとあそこのカラスを白日の下に照らし出す永遠の光だと思っているかの如くである。日はまた沈むのに。

違いへの我執が黄金の中庸を隠している。世界中、似た状況である。バイソンを絶滅させて置き換えた家畜を毎日食っているグリピースが日本人の捕鯨を非人道的と非難する。ベトナム人を林、水田もろとも殲滅しようと戦争犯罪を重ねたアメリカ政府が人権の守護者をよそおって、あちこちに介入する。己は神、他は人と違いを主張するかの如くである。かつて多数の人間を中国や朝鮮半島から連行した日本政府は10人の日本人が北朝鮮に拉致されたとその蛮行を非難する。かつての強制連行は楽園への招待と思っているかの如くである。かつて2発の核爆弾で30万人の日本人を無差別に殺し、現在もロシアと共に5万発の核弾頭をもつアメリカ政府が、北朝鮮やイラクの核兵器開発をテロ国家の仕業ときめつけて、経済封鎖を行う。己は批准しないCTBTの批准をインドやパキスタンに迫る。こうした行為の欺瞞は世界中の人間に見ぬかれている。しかし他の人間は己と違って目が見えず、理性がなく、欺瞞を見ぬけるはずがないと、そこの己は信じているかの如くである。

違いがすべてを調節する神の手であるかの如くである。人と対象自然は違い、自己と他己は違い、民族は互いに違い、国境の向こうは違う国家である。生活文化の違い、政体の違い、宗教の違い、文明と未開の違い。違い、違い、違いの無限級数。違いの間の断裂線で囲い込まれ、標識を付けられる無数の物理的、形而上的時空間が族生することになった。近代科学を例にとると、初めに付けられた標識は単なる番地に過ぎなかったが、生存のために違いを金科玉条の護符としたがる人々は、それを垣根で囲い、城壁で囲い、天地を分断するバベルの塔に変えてきた。自然と人を分離し、主客を分離し、対象を細かく細かく分けることに猪突猛進してきた。その唯一の論理は、Aと非Aは異なるという排除の論理である。その結果、踏みつけられ、人間の勝手気儘に扱われてきた自然が人間に警告を出し始めた。地球温暖化、環境ホルモン、森林消失、新旧の感染症の多発などは、人間が自然の一部に過ぎないことの明確な信号である。

地域紛争の多発と遺伝的被害の深まりは、技術と制度の進歩に関して近代社会が無惨な錯覚を持っていたことをさらけ出した。

「専門家」任せの方向は明らかに根本的変換を迫られている。細分された領域で皆が自己の生存だけを考えている内に、番地の中に孫番地、ひ孫番地がどんどん増えて、全体の配置図がどうなっているのか、誰も判らなくなってきた。近代科学の諸分野は、違いを見つけ、異物を排除する営為が産み出した産物の乱雑な野積み場になってきた。近所を繋ぐ短い踏みつけ道はあるのだが、それらは互いに繋がっておらず、無数の袋小路がてんでんばらばらにある。番地が判らないから、郵便配達人もいなくなった。早い話、脳と神経が統括する働きを失った細胞の集合体だけがあるという状況に近い。

大学の役割は過去と未来を繋ぐ見通しと、繋ぐ方法を社会に提供することであり、科学が有機的統合を失っている状況に我々は立ち向かう以外、存在理由はない。社会的関係に目を向けるとなると、問題は環境破壊や、地域紛争にとどまらない。社会の身体性を支える基本単位が問題含みとなっている。己のすぐ身近にも家族の形の変化、心の病気の多発、行き過ぎた延命治療や臓器移植で己から分離しつつある己の体と死、人間関係のサド・マゾ化など、難問が山積している。プロイラーや豚を身動きならぬケージに閉じ込め、自然にない人工物を作り出した欲望と制度の自己破産が露わである。これらの背後にはすべてを貨幣価値に置き換える以外の価値観を知らない現代資本主義のブラックホールがある。

しかし資本主義のブラックホールがすべてだと思いこむと、マルクスの落とし穴に落ちる。身体大の現実世界、コミュニティと言い換えてもいいが、そこには自然と精神と制度のバランスを求める過程で生まれ、長い伝統を持つ無数の価値観がある。「文明社会」にも、「未開社会」にも文化があることは共通している。レヴィ・ストロースに発見してもらって、初めてその共通性が認識されると考えるところに、違いの呪文に憑かれた「専門家」の偏りがある。現在のさまざまな問題は、ブラックホールに拠る一握りの人々が意図的に流している幻覚が生み出していると私には見える。その意図は覇権の拡大に邪魔になる伝統的価値観を取り崩すことだ。そして、「専門家」はその意図に奉仕することに邁進している。そこに作られた「文明社会」、「先進国」は、自己を「未開社会」や「発展途上国」のまえにきらびやかに、軽蔑の眼差しを持って、展示する。もっと豊かに、もっと綺麗に、もっと便利に、もっと強くという「普遍的」欲望を実現した成果を誇示する。しかし、じつはこの「普遍的」欲望は幻覚剤を包むオブラートである。幻覚のもとにおかれた現実世界では、もっと貧しく、もっと荒廃した、もっと身動きのならぬ、弱められた自然と精神と制度の世界へ地球は向かっている。

地域研究が、違い、違いの断裂線で仮想的に細分されたある空間の特殊性を述べることなら、地域研究機関のスタッフはそれぞれの地域の人間で構成すればよい。欧米人や日本人が覇権維持のためにそれらの特殊知識を集めることだとするなら、「発展途上国」からの批判を免れな

いし、さまざまな情報収集機関がすでにある。そんなものと同じにはなりたくない。地域研究は、私のイメージでは、身体大の世界を弱めようとする地球大の幻覚を取り除くことだ。一つのことには偏らず、黄金の中庸を心がけてバランスのとれた十全な地球世界の創出に貢献する、それが地域研究である。その目的が達成できるかどうか断言はできないが、我々の何よりの強みは新しい出発点に立ったことである。生まれたばかりの赤ん坊が持っている可能性とエネルギーの塊、その状態にある。これは既存の体系に浸っている旧来の諸分野が決して持ち得ない境位である。生まれて成長することは自然と社会から栄養をもらい、既存の知的ストックを主体的に再編成することである。その主役は学生諸君である。古い枠組みの中でもがいている教官を手本にしては、発展の可能性を摘む。生まれたものが生むものとなる生命原理に則った成長を目指せば、豊富な現実世界は必ず、学生諸君を支えてくれるにちがいない。

2. 固有性と共通性

前節では踏み出す方向にふれたが、ここではなにを手がかりに歩くのか、述べてみたい。古い殻を引きずっている教官達が漠然と立てているのは地域の固有性という道しるべである。しかしこの道しるべは眺望の開けた高みに通じるのか、見通しの利かない、抜け出し難い谷の藪に連れこむのか、吟味する必要がある。商標としては新鮮な魅力に欠けるし、ものの認識としても、現実の持つ目も眩むばかりの重層性に文字通り目が眩んだ視線になっていないか？

一人の学生は鋭く要点を突いている。「地域の固有性を地域の内部から捉えていく方向性はほとんどアプリアリに共有されているが、そのことに対する十分な批判的内省の議論がきわめてまれである」。固有性を地域間で比較することからさらに踏み出して、現代の世界性を規定するさまざまな問題にどうアプローチするのか、その議論がないのではないかと指摘している。この指摘を教官はシニカルな冷笑で受け流すことはできない。

業界で地位を占めてから言ってくれといった反応が大方のものと予想されるが、この指摘を聞き流すような集団は業界として成立しえないだろう。もっとも、「社会における知的権威を市場原理で代用させてしまう…マーケティング論の錯倒と共犯関係に陥っている」[米本 1998]と批判される日本の知識人、科学者集団のあり方が続くのなら、業界参入はありうるかもしれない。しかしその場合、地域研究は新たな領域としての魅力を失い、旧来の業界に吸収され、消えてしまう恐れも大きい。

地域を固有性だけでなく、共通性、連続性のなかに位置づけることが必要なのだ。そのことを私の経験に即して述べてみよう。たとえば、固有性は1地域を1つの視点から見ることによって把握できるのだろうか？ 地域の固有性を生きることはどこの世界でも実行していることだが、それを表現しようとする、2つの事柄がどうしても必要になる。何らかの対照枠との比較、それと複数の視点である。既存の言葉では前者は地域間比較、後者は学際的視点である。京都大

学東南アジア研究センターの歴史を振りかえると、実行がかなり困難なこの標語を奉じて突っ走ったのは、ナイーブな自然系の者達だった。しかし、地域とは、地域研究とは何か、十分な充足感をもって言える境位にはなかなか到達しなかった。

その原因を振りかえてみよう。第1に、標語に惑わされ、新たな領域として地域研究を確立するのだという自覚がなかった。旧来の諸分野の空間的拡大を目指す域を出なかった。この反省は、今も一部の学生諸君が苦し紛れに、経済学、政治学、生態学を志向する傾向に対して、反面教師の役割は果すだろう。

第2に、方法論として知らず知らずの内に要素還元的見方に陥っていた。私どもは旧来の専門諸分野から転向して地域研究に入ったため、現象を少数の要素で説明してしまう見方が体に沁み込んでいる。この文すらその印象を持って読む人は多いにちがいない。複雑な現象を細分し、因果論的連関を切り取る偏りがある。部分自然についてはそれなりに詳しいが、全体自然については知らない、知る必要もないとする自然科学の日本的受け止め方からぬけだすのにヒマがかかった。1つの価値観を押しつけて、地域を仮説検証の材料におとしめていると経済学を批判していたが、同じ穴のムジナだった。

第3に、地域の構成に関わることだが、伝播に対する十分な注意が欠けていた。生活文化や思想、制度、それに植物や動物も移動・伝播することは知っていたが、地域認識に適切に取り込めなかった。ある地域に存在する事象は、即その地域の固有性だと考えてしまいがちだった。逆に、たとえば、インドネシアに色濃く認められる西アジアの影響にとらわれて、それを西アジアの文化的植民地だと思いこむ傾向があった。目にする事象を没価値的に、メティキュラスに描写することが地域の固有性把握であると、思いこんだ。そのような過程は必要ではあるのだが、それだけでは十分でなく、その上、谷底の藪に道を見失う恐れも大きい。伝播現象を受容して実践的にそれを変えていく主体性を見ると共に、さらに生命原理に従う共通性が、自然を社会化する関係性の中でどう分節化されているかに、地域の固有性を見る認識が欠けていた。この境位が地域の共通性と固有性を見るということだ。岩田慶治氏はこここのところを、地と柄を見よ、視線を水平線に合わせなさい、「存在の意味は背景に由来している」と言われる〔岩田 1989〕。その注意が判らなかつた。この誤りは相当長期間克服されずに続くだろう。異文化に対するエキゾティズム嗜好は一般に根強く、したがって、学生の異地域参入の方法として最も容易だからだ。マスコミからの需要もそこに重心がある。違いの発見ないし発明は近代文明社会の売りの道具立てでもある。

地域固有性を皮相的把握にとどめるこの幼稚な考え方を私ども数人はそれなりに克服し得たつもりである。穀作農耕文化と言う1要素に限定されてはいるが、ユーラシアにまたがる伝播を仮説として抱くに至ったからである〔古川 1988〕。各地域に固有と見える農耕文化も実は共通の1つの体系が基礎にあり、受容地での変形様式に各地域の固有性がある。言わば、単板

で固有性を見るのではなく、伝播経路、ネットワーク、受容地域の自然、文化伝統、新たな創出技術と、3段、4段構えの繰り込み形式で固有性を把握するということだ。この見方はまた大陸規模で地域が結ばれているという確信をもたらした。

第4に、現代社会の価値観に踏みこむことをしなかった。関心が無かったわけではない。関心は強いのだが、「科学研究が社会的価値から自由であるという日本のフィクション」[米本 1998]にとらわれていた。米本の批判が全面的に正しいとは思わないが、フィクションに縛られていたことは確かだ。しかし1990年頃には私も価値観の問題にアプローチを始めた。一方的な価値観の強制が広大な林を伐り、実体的空間を蟹気楼の土地に劣化した事件を描いた『インドネシアの低湿地』[古川 1992]では、住民の価値観と政府・世銀の価値観を対比した。生態的な論理に依存した住民の姿勢と、進歩とは自然を支配し商品化することだという政府・世銀の姿勢がある。この対立こそ地球大で生じている環境と社会をめぐる対立の核心だと、今は痛感するが、その時点では意識が1地域にとどまった。なるほどフィクションで人を縛ることに長けた文化があると実感したのは、1995年以降、ブラジル、カナダなど新世界を見てからだ。

日本が近代に作ったフィクションは1つか2つだが、ヨーロッパの歴史は、自由と平等、平和と友愛で支配と戦争を隠し、略奪による繁栄を勤勉と謙譲に基づいた進歩と自賛し、最近に至るも、人道的支援を掲げて爆撃を辞さないといった具合で、フィクションに満ちている。この人達が新世界へ来て、自然と人口を入れ替えてしまった。新世界を見た衝撃で近代アジアを振りかえり、新世界の状況とともに、『植民地支配と環境破壊—覇権主義をどう超えるのか』[古川 2001]を書いた。そこで明らかにしたかったことは、近代文明の価値観が実体としての自然と地域社会を破壊する方向に向いており、その認知を麻痺させるさまざまなフィクションを持っている。自然と地域の破壊をとどめるにはどうするのかである。地域の固有性、つまり、1つの柄に視線が偏っていると、地平線つまり共通性が目に入らなくなる。

3. 地域と地域研究の拡大

第5に、地域の認識論的構成に目を向けなかった。この点は3、4の考察とも関連している。自然系の人間は見えて触れて、計測し、分析することで自然への認識を進めていく。その方法を地域の把握にも無意識の内に当てはめていた。現場（フィールド）主義は地域研究の公理だと思うが、現場の意味内容を拡大することが必要であったのだ。フィールド重視の道標は我々の研究科でこれもやはり漠然と立てられているが、フィールドの内容を吟味することは焦眉の急だ。

今の時点で、地域を私は次のように考えている。地域の発生はまず自然ありきである。始めにことばありきの声高な主張はたかだか最近200年の文明人の錯覚である。人間という生物は

出現以来、自然のエネルギー流をとりこみ、身体を維持増進し、群れを作ってきた。その延長上に文明や制度も作り出した。自然のバランスのとれた社会化が人間の発展の原動力である。自然を社会化する営みの中で、それぞれの群れ特有の地域が発生した。

こうした地域は3個の相から成ると考えている。1つは現実の相、つまり、自然と人が直截に相互浸透し、文化や制度も活動態としてある相だ。生きられる共同体としての地域である。自然系の人間が脳裏に描いていた像はこれである。この相はかつて＜自然地域＞と名づけた。

しかし地域は＜自然地域＞だけで扱えるほど生易しいものではない。もう1つはフィジクに対してメタフィジクがあるように、＜自然地域＞に対する＜メタ地域＞の相がある。伝えられ、語られ、称えられ、非難される地域、いわば人間の脳裏に「かの如く」描かれる相としての地域をどうしても想定せざるをえない。2個の相は鏡と鏡像の関係だろうか。鏡像は鏡という外が存在が介入する。2個の相は存在自体の中にある。たとえば1枚の紙の表裏、ものとその影、人とその足跡ではなからうか。

すべての地域は太古以来2個の相の共存体であろう。2個の相が共存する地域の全体像はどう呼ばいいのだろう。ものの認識のレベルについて、仏教の唯識派では、遍計所執性、依他起性（縁起性）、円成実性の3つが古くからある。これに則れば、2個の相を踏まえた全体相は円成実相と言える。最近の西洋哲学でも、自然認識について、生物的自然、媒介的自然、全的自然の3項が考えられている〔中村 1999〕。判り易い用語ということで、＜全的地域＞と呼ぼう。注意をしておきたいのだが、私の言う＜メタ地域＞は媒介的という含意とは重ならない感じがある。媒介的自然は今西錦司のいう部分自然により近い。

かつて高谷好一は地域個体を把握する試行の中で世界単位概念を考えた。それは＜自然地域＞を＜メタ地域＞のレベルで映し出すことに成功している。「ひとつの生態の上にはそれに適応した一つの生業が成立するし、そうしたところに住む人達は共通の社会を作り、世界観を共有することになるのではないか。この生態・生業・社会・世界観・コンプレックスを世界単位と呼ぼう」〔高谷 1997〕。＜メタ地域＞で地域個体を区分するのに使われた中間項は生態区概念で、広域の観察体験がマクロな地域個体把握に迫真力を与えている。

あれこれの＜全的地域＞は＜自然地域＞の相と＜メタ地域＞の相がバランスを保っている間、地球全体社会の秩序ある発展に寄与してきた。しかしそのような関係は近・現代になって大きく変質した。弱肉強食の接触が地球大で進み、人間の自然征服という誤った考えが拡散した。その結果、＜メタ地域＞が1人歩きをし、＜寄生メタ地域＞が出現し始めた。植民地や、とてつもない巨大都市といった存在である。現代はさらにクローン生物とか、核兵器とか、自然の根本的劣化をもたらす要素が作られて、巨大な＜寄生メタ地域＞の展開が危惧される状況である。

こう考えると、初めに述べた地域研究の目的は、＜全的地域＞の覚醒で＜寄生地域＞の暴走

に歯止めをかける手立ての発見だと思う。その際のフィールド概念は質的にも空間的にも、大きな変革を迫られていることは明らかだ。

地球全体社会はさまざまな価値観を抱えている。その中で現代資本主義の価値観が異常増殖している。地域の固有性を求めるのは結構なことだが、地球大の癌の進行を押しとどめる前傾姿勢で固有性を見る視線が要る。このことは生命原理に従うどの〈全的地域〉にもある地球大の共通性を背景にして固有性を見ることである。背景から取り外した地域を博物館の展示品のように記述しても、存在の意味が生起しない。これでは現実社会の問題に背を向け、不毛の虚構世界に潜り込むことになる。カウンターカルチャー業界のマイナーな需要に応じるだけでは、寂しいことだ。しかし、地球大に地域を見るといっても、時間がかかる。複数の視点も、とくに学生にとって、どんな視点を獲得すれば良いのか頭で考えても判るはずがない。

それではどうするのか。まず、すべての地域は連なり合って、地球全体社会を作っているという大前提を置くことだ。この額縁の中に対象地域を置く。背景があつて柄の意味が生まれてくる。次に、どの地域も〈自然地域〉、〈メタ地域〉、〈全的地域〉3相から成るその全体構造の解明に立ち向かう決意を持つことだ。それぞれの相の形は地域ごとに違う。多数の地域を比較することは学生にとって、大変な難事である。1つの地域でも良い。3個の相に自分を全露出することだ。そこにあるエネルギー流に全身を曝し、全方位のアンテナを張る。そして、黄金の中庸を求める。その努力が違い、違い、違いの無限級数に取り込まれた「専門家」の既成分野を突き抜けて新たな実践知を生む道だ。

〈自然地域〉への徹底した曝露は自然と精神と制度の調和を発見する必須の道だ。〈自然地域〉と付かず離れずにある〈メタ地域〉への意識的な曝露はさまざまな言説の偏りを超える道だ。〈全的地域〉の追求は〈寄生メタ地域〉に対する挑戦の意志と方法を与えてくれよう。1つの地域にあるこれらの相を意識的に往還することが、地域の固有性と地球大の共通性に己を曝露することになる。

地域を額縁から取り外して固有性を摘出せよと言う要求は、自然と大多数の人間を踏みつけている人々が目眩ましに張っている煙幕だ。知識人はとりわけこの煙幕に弱い。たとえば、多様性の保全を言いたてる人々が、多様性の認定に1つの基準をあてはめる操作で、価値観と制度と実体を単質化する企みに簡単に巻かれてしまう。巻かれることがギルドに加わる方法という悲しい次元もある。これでは中庸に則った新たな分野の開拓は実現できない。地球全体社会の連なりを前提とすることは目眩ましの濃い煙幕の中で道を見失わないための鉄則である。踏みつけている人々の虚構を暴く理性の声、天地の声である。共通性を求める視線が、真に保全せねばならない固有性を発見するのだ。

要約しよう。〈全的地域〉に寄生している〈寄生メタ地域〉を発見し、それを取り除く実践に踏みこむことだ。地域個体はすべての存在同様、みな違う。しかしその違いはバラバラにあ

るためのものではなく、共通の生命原理を実現するための違いである。地域には地球大の共通性も、地域独自の固有性も埋め込まれている。そこに生じている今日の問題の解決を求め、中庸の実践を心がければ、対照枠との比較も複数の視点もおのずから備わった地域研究が成るにちがいない。それこそ新たな地平を開く実践知である。

引用文献

- 今西錦司. 1986. 『自然学の提唱』 講談社.
岩田慶治. 1989. 『カミと神 アニミズム宇宙の旅』 講談社.
ブクチン, マレイ. 1996. 『エコロジーと社会』 藤堂麻理子・戸田 清・萩原なつ子訳. 白水社.
高谷好一. 1997. 『多文明世界の構図—超近代の基本的論理を考える』 中央公論社.
中村雄二郎. 1999. 『哲学の五十年』 青土社.
古川久雄. 1988. 「オアシス農耕文化の道」『海のシルクロードを求めて』 三菱広報委員会
———. 1992. 『インドネシアの低湿地』 勁草書房.
———. 2001. 『植民地支配と環境破壊—覇権主義をどう超えるのか』 弘文堂.
米本昌平. 1998. 『知政学のすすめ—科学技術文明の読みとき』 中央公論社.